

今も清寒山道き山嶽に霜
 長石磊々潤潤草莽
 松鳴不假風誰能
 超世果共坐白雲中

五言古 宮田武義氏

寒山片雲

支那の詩人寒山は八、九世紀の人である。彼とその兄弟は親譲りの田地を耕していた。しかし彼は兄弟と縁を絶ち、妻と家族に別れ、諸方を放浪しながら、多く書を読んだ。そして取り立ててくれる人を求めたが、徒勞に終った。彼は遂に寒山に隠棲し、かくて寒山という名で知られるようになった。その隠棲地は、寺院と道觀で有名な天台山から約二十五マイルのところ、寒山もしばしばそこを訪れた。彼はその詩の一つで、百歳を越えた自分のことを語っている。これは

登陟す寒山の道、寒山、路窮まらず、谿長くして石磊々、潤潤くして草莽々々、苔の滑らかなるは雨に關わるに非ず、松の鳴るは風を偲るにあらず、誰か能く世界を超えて、共に白雲の中に坐せん。

「書は山水楼主人・宮田武義氏」

多分誇張であろうが、しかし彼が長生きをしたことは確かである。

彼の詩においては、「寒山」は地名としてよりは、一つの心境の名である場合が多い。彼の詩のミステイシズムは、この理念に根ざしているものであり、それはまた「隠された宝」すなわち仏は、我々の外でなく我々の心の内にこそ求めらるべきだ、という理念にも根ざしている。

右は、英国の東洋文学研究者として名高いウエイリー氏の

寒山詩の解説である。(入谷義高氏注「寒山」より引用)

天台山は浙江省に在り、古く陳の智者大師が山を開いた(五七五)。我が国では最澄(伝教大師)が入唐、智者大師の七世の法孫・道邃寿に就いて学び、帰朝後、比叡山に天台宗を開いた。これは平安初期の桓武天皇の時(八〇五)であるが、その頃、寒山は在世して居たことになる。我国でも寒山は捨得と共に画題にされ、また森鷗外の小説や、岡本かの子の戯曲で有名である。次に、寒山詩およそ三百首のうち、数首をくだけて訳してみた。大方の御示教を冀う次第である。

我れ聞く天台山

山中に琪樹ありと

永言して之に攀んと欲するも

石橋の道を曉にする莫し

此に縁つて悲嘆を生じ

幸居して將に暮れなんとす

今日、鏡中を覩れば

颯颯の鬢、素を垂る

天台の山の深みに珍らしい、珠玉のなる木があるという。俺も登って手折ろうと、宝探しの幾年ぞ。珊瑚に真珠瑠璃瑠璃、求める欲の皮袋、これの重荷に耐えかねて、石のきざ橋渡れずに、たもとのとこで日が暮れて、まごまご過して居るうちに、鏡に映る鬢の毛が、いつしか秋の霜うけて揺れているよハラハラと。

笑うべし寒山の道

而も車馬の蹤なし

聯溪、曲を記し難く

疊嶂、重を知らず

露に泣く千般の草

風に吟ず一様の松

此の時、徑に迷う処

形、影に問う、何れよりかせんと

人里はなれた寒山は、馬も車も通りやせぬ。九十九に曲

る谷合いに、露を含んで草は泣き、重なる峰に伝わる

は、松の奏でる風の唄。道に迷ったその時は、おらが行く

とどここだんべエ、途方にくれたこの俺が、きけば答

える影法師。

一たび寒山に向つて坐す

淹留三十年

昨、親友を来訪ぬれば

大半は黄泉に入りぬ

漸く滅して残燭の如く

長しなえに流れて逝川に似たり

今朝、孤影に對し

覚えず涙は双び懸る

寒山に棲みついてから三十年。独り暮しの明け暮れに、

友の身の上気にかかり、山を下つて訪ぬれば、あれもこ

為に報ず、往來の者

来つて寒山に向うべしと

フーテンと呼んでくれるが、そうかいな。人目にとまる

装もせず、ただ隠れ蓑まとうだけ。俺の心は人知らず、

娑婆の話にや用はない。有家無家の皆の衆、俺に会いた

くなつたなら、登つておいで、山は寒いぞ。

寒山に裸虫あり

身白くして頭黒し

手に両卷の書を把る

一道とまた一徳と

住むに釜竈を安んぜず

行くに衣袴を齎らさず

常に知慧の劍を持して

煩惱の賊を破らんと擬す

寒山の頭の黒い裸虫、身は人並に色白で、着物まとわず

飯炊かず、手に一對の巻物と、知慧の劍を抜き持ちて、

押しよせ来たる煩惱の、賊を破らん意気高し。

人、寒山の道を問うも

寒山、路通ぜず

夏天、氷いまだ積けず

日出づるも霧朦朧たり

我に似るも何に由りてか屈らん

君と心同じからず

れもの大方は、黄泉の国へぞ旅立ちぬ。灯火消えた灯籠が、川に浮んではてもなく、とり残されたこの俺を、忘れたように流れ行く。呼び戻そうとする俺の、やせ衰へた両頬の、冷たいものは涙かや。

客、寒山子を難す

君の詩に道理なしと

吾れ古人を觀るに

貧賤を恥と為さず

之に応じて此の言を笑う

何ぞ疎闊を談ずるやと

願くは君、今日の似く

錢は是れ急事のみ

俺の詩に道理がないと人の言う。道理というのは世事かいな、昔の人は錢金を、賤しいものとしていたと、言い聞かせるとその男、開き直つて何をいう、出鱈目いうなど腕まくり。そんなに錢が欲しいのか、地獄に錢は要らぬわい。

時の人、寒山を見て

各謂う、是れ風顛なりと

貌は人の目を起さず

身は唯だ布袋を纏うのみ

我が語、他は会せず

他の語、我は言わず

君の心、若し我に似たらば
還た其の中に到る事を得ん

寒山に登って見たい人あるが、ここへ通ずる路はない。
夏なお寒いこの山は、氷の溶ける時もなく、いつでも霧
が立罩めて、陽の光りさえ射す間なし。俺の格好まねる
とも、同じ心になるまでは、ここへはとも来れやせぬ。
君の心に俺のよな、悟りが少し湧いたなら、ポツポツお
いで此の山へ。

去年、春鳥鳴き

此の時、弟兄を思う

今年、秋菊爛れ

此の時、発生を思う

緑水、千場に咽び

黄雲、四面に平かなり

哀しい哉、百年の内

腸は断ず、咸京を憶いて

春鳥鳴けば人恋し、秋菊咲けば生哀し、緑の水は涯しな
く、空には寒い茜雲、都の方はどつちかな、行って見た
いと思うけど、此の世の命短くて、行方も知れぬ漂ら
いの、果てしもわかぬ草枕。思えば悲しい思い出が、老
いの枕に行き通う。

昨夜、夢に郷に還る

婦の機中に織るを見る

寂々々として塵埃を絶す

草座、山家に有り

孤燈、月輪明かなり

石床、碧沼に臨み

虎鹿、毎に隣を為す

自ら幽居の樂しみを羨い

長しえに象外の人とならん

この詩にあるように、天台山系には虎がいたのである。豊
干禪師は、虎を飼ひ馴らして乗用していた。或る日、虎に乗
って山中を散策していた豊干は、赤城道というところの路傍
で泣いている一人の男の子を見た。禪師は虎からおりて、こ
の児の頭を撫でて、「これこれ、どうしたか」と訊くと、「こ
こに乗てられました」と答える。これはいい拾得物だとい
うことで、豊干はさっそく、この子に拾得と名ずけて、寺に
連れて来た。

やがて、この子が寺房の食堂で働くようになり、鍋釜の洗
い方を受け持つ。彼は己の身の上に思いをはせて、捨てるこ
とは罪悪だと観じていたのであろう、「残食菜滓」の一切を
残らずかき集めて竹筒に入れ、これを寒山に与えることを常
とした。寒山は、この竹筒を背負って、自分の棲処の寒巖に
帰った。拾得の詩にこんなのがある。

従来これ拾得
是ち偶然の称にあらず

梭を駐めて思うこと有るが若く
梭を撃ぐるに力無きに似たり
之を呼べば面を廻らして視るも
況として復た相識らず

応に是れ別れて多年

鬢毛、旧の色に非ざるべし

昨夜は夢で里帰り、別れた妻に会って来た。機を織つて
たその人は、しょんぼりとした面持で、梭も動かさず物
思う。俺が来たよと呼びかけりや、こつちを向いて知ら
ぬ顔。思い出せぬも無理はない。別れて以来幾年か、俺
も白毛がふえたから。

天台山系は、錢塘江が杭州湾に注ぎこみ、その湾が東支那
海へ大きく口を開く下顎のあたりから西南へ延びている大山
脈である。その最高峰は一万八千丈にも達すると古来いわれ
ている。この山系の中に天台山があり、また寒山もある。天
台山麓に台州という町があって、唐の時代には、ここに台州
刺史(知事)がいて、天台山を中心に散在する道観(道教の寺)
や仏寺などを所管していた。

天台山に在る有名な国清寺に豊干禪師という名僧がいた。
この人が寒山とその弟分の拾得の育ての親である。寒山の詩
の中にこんなのがある。

寒山、唯だ白雲

別に親しき眷属なく

寒山はこれ我が兄

兩人の心、相い似たり

誰か狗族の情を能くし

若し年の多少を問わば

黄河の幾度か清たりきと

人々は、豊干を阿弥陀仏と称び、寒山を文殊菩薩、拾得を
普賢菩薩と称んでいた。豊干の詩は、寒山詩集の中に二首あ
る。その一つに、

本来無一物

亦た塵の払う可きなし

若し能く此に了達せば

坐して兀々たるを用いず

というのがあつた。これは、六祖慧能(六三八一七一一)の心
機を詠ったものであろう。

この豊干禪師に帰依する者の一人に、閻丘胤という人がい
た。閻丘が或る日、禪師に向つて「私は、この度、台州に刺
史として赴任することになりましたが、あのへんに教えを乞
うような立派な人は居ませんか」と訊くと、豊干
は、「いるともいとも、僕(ぼく)の旧と居た天台山国清寺に文殊
と普賢が居る。文殊は寒山、普賢の方は拾得という。二人と
も乞食のような風態で、チヨット気狂いじみてゐる。使い走
りをしたり、台所まわりの下働らきなどをしてゐる。行つて

会って見るがいい」と云った。

閻丘胤という人は「朝議大夫、使事節台州諸軍事、守刺史上柱国、賜緋魚袋」といういかめしい肩書をもった当時一流の官吏であった。やがて、この人が属官を従えて国清寺にやって来た。道翹という坊さんが案内役となり、豊干禪師の旧居などを見廻って、台所にやって来ると、寒山拾得の二人が、洗い場で釜を洗っていた。閻丘知事が土下坐して、うやうやしく三拜九拜の礼をとると、寒山は、「俺等を拝んで何にならぬ。豊干のおしやべり、が……」などと云い放ち、ゲラゲラと笑って、拾得と共に寒巖に遁走する。知事は岩穴にやって来て、あらためて、師礼をつくし、「せめて、お近ずきの印に……」と、浄衣や薬品を差し出すと、彼等は大声で、「どろぼう、どろぼう」と叫ぶ。知事の一行が呆然としてみると、穴の中から「汝諸人各々努力」との託宣があり、そのとたんに、石の戸がガタンと閉まってしまった。それ以来、寒山と拾得の姿は見られなくなったという。

寒山の寒い風をくらって、知事は得るところなく、やむなく国清寺へ戻って来る。そこで道翹を呼んで、寒山と拾得の詩を集めるように命じた。命により、道翹が、林間や人家の壁に書き散らされた寒山拾得の詩や偈を集め、これに豊干禪師の詩を加えて出来上ったものが、寒山詩集である。

以来、千数百年の星霜を経て、生きてきた寒山詩集は、いろいろなかたちで人間に伝来したが、その中の有力なものとし

て「宋本寒山子詩集」が我が皇室にある。これは天下の稀覯である。

さて、岡本かの子の戯曲「寒山拾得」に、豊干禪師がまだ国清寺にいた頃、閻丘が国清寺を訪れた場面がある。閻丘（茶碗の蓋を開けて中を見る）ほほう、今度は海棠の花の塩漬が入って居る。先程のは梅花でしたな。流石、山寺は風流なものですな。

豊干—そう風流がられては痛み入る。止むを得ぬ風流ぢや。山寺は茶さえ尊くたし、ないものになっている。で、茶は病僧の心気を調える為の薬用か、さなくば茶礼の儀式に用ゆる時に少しづつ大事に使うのじゃ。俗人の客来には先ずこいういものを茶の代りに用いるな。ありように云えば、風流を用いて俗眼を欺くのぢや。はははは。

閻丘—いや、風流はそういう必然から生れねば、えて嫌味になるものです。わたくし共は悦んで風流に欺かれます。椀中に四季の花を賞し得らるる山寺の貧福。ただ浦山敷く存じます。

豊干—どうもそう感心されてはいよいよ挨拶に困る。わしはこの椀の中を見る度に、せめてこの花漬の塩代がもつと助かる法はないかいつも考えるのぢや。塩代を助けて雲水達の米麦をもつと厚うしてやり度いと思うのぢや。が、それでは花漬が腐って仕舞うし、惜しい惜しいと思ひ乍ら椀の中の花を飲むのぢや。

寒山子詩集

題詞

飲み且つ食らう、寿にして康「宮田武義氏書」

このへんのやり取りの具合から見ると、国清寺の台所は豊かではなかったであろう。また、禪利の雲水達の食べ方は、一粒の米粒さえ残さない。従って、拾得が集めていた国清寺の残食菜滓というものは、鍋釜の洗い流しがすべてであったであろう。

洗い方主任の拾得に手伝って、鍋釜を洗い終ると、寒山は、洗い流しを入れた竹筒を肩にして、寒巖の岩穴に戻る。彼は道すがら、藪、独活、ぜんまい、蕨、蒲公英、あざみ、なづな、山椒などを摘み、谷間に自生する天然山葵や芹、元茜などを採り、また、秋ともなれば、椎の実、栗などを拾い、時には野蒜や山芋を掘って帰るのであった。

「住むに釜竈を安んぜず」というからには、彼の煮炊き設備は不完全なものだったろう。彼は持ち来った洗い流しに、四季とりどりの幸をあしらって、稀飯粥を作った。われわれは、いま、かりに、これを寒山粥と称ぶが、この類の粥は今でも広東あたりで賞味されているということである。米粒の

稀な寒山の粥は、時には、揚げ油の香りに満ち、また時には、豆腐のくずや沢庵の尻尾が混っている。濃羹の時もあれば清羹の時もあり、あなたまかせである。塩のたしな山寺では、塩気はおそらく空しかったであろうし、調味料を加えないこの雑炊は、折々の天然香辛料で自然の風趣を具えていたことであろう。いわゆる老子の「無味の味」とは、そんなものであったであろうか。藪雑炊、ぜんまい雑炊、野蒜汁、なづな汁、栗汁、芋雑炊と、寒山の献立は、正月の七草粥から始まって、自然の運行と共に変化する。

「菜根を咬得ば百事做す可し」（菜根譚）という言葉がある。菜根とは粗末な食事と解して差支えなからう。千古に独り秀で、いかなる歴史にもゆるぎない寒山の詩は、棄てられた人間が、捨てるべき残り物を掻きあつめ、それから創り出されたものだということ、われわれは深く味わうべきであろう。われわれ自らの人生の中にも、また、文明の生々流転の中にも、この理がひそんでいることを思えば、「食べ物」が百事の成敗を左右し、「食べ方」が人間の生存にいかにかい関係を持つかに気づくであろう。この原理を心得て、塩梅できる者を料理人という。犬養木堂は、かつて「塩梅宰相之材」といったが、塩梅こそ料理の極処である。

詩は人生の妙境であり、料理は人類の大事である。諸人各々が努力精進すべきことであろう。



吉井勇の歌「谷ふかき苔のかけはし
踏みわけて寒山や来る拾得や来る」
を刀刻した棟方志功氏の版画

この「寒山片雲」は、東京名物誌(昭和四三、緑陰号)に掲載したものであります。

この文は、寒山に関する貴重な文献として、財団法人・東洋文庫及び東京大学史料研究室から、永久保存の指定をうけました。

その後、各方面からひき続き御所望が多いので、原文に多少の筆を加えたものを、ここに「庖丁余語」第六号として再版いたしました。

東京名物編集主幹 千賀富士男